

金沢大学資料館だより

No.26 Aug. 3 2005



「芝蘭堂新元會図」医学部記念館蔵

— 目次 —

| | |
|--|----|
| 就任の挨拶 | …2 |
| 医学部記念館所蔵資料から | …2 |
| 金沢大学附属図書館所蔵（旧制第四高等学校旧蔵） 広開土王碑拓本について | …3 |
| 資料館彙報 | …8 |

資料館長あいさつ

貴重な歴史資料の保存と活用 —— 大学の教育・研究の発展と社会への貢献

資料館長 田中 重徳

卓越極まる資料館長として平成13年度から2期4年間務められた笠井純一先生の後任の命を賜り、本年4月より資料館長に就任しました。平成16年4月1日から国立大学は独立法人組織となり、笠井純一先生の多大極まるご尽力に感謝致し、立派な学識と崇高な見識と考慮を尊敬致しております。そして、委員と研究員・客員研究員の先生方と実務を担当されておられる在田則子氏と田嶋万希子氏、事務担当の皆様にも感謝致します。

金沢大学資料館は学内共同利用施設として、学内の学術研究資料を系統的に収集、整理及び保存し、教育研究に資すること、そしてその目的達成の業務として(1)資料の収集、整理及び保存、(2)研究会、講演会等の開催、(3)他機関との相互交流、(4)資料の展示などが定められております。

本学工学部は本年8月から9月における移

転進行によって、全ての教育・研究科が小立野から角間に移ることになります。これまで、工学部長尾田十八教授、各科の教授をはじめとする教員と技術職員と事務職員、そして事務部の皆様の支援と尽力を賜り、貴重極まる資料を数多く収集致すことが可能になりました。今年度の資料館特別展と公開講演は当該資料をも含めて、偉大な工学資料を活用させて頂いて行う予定であります。

価値極まる資料と直に接する観察者は感激と活発な思考回路にて自信に満ちた知識を修得し、理解度を著しく高めます。更には、その後において数次に接することにより、観察と理解と考察の度合いを一段と発展させます。

貴重資料の“百聞は一見に如かず”は育英にとって極めて重要であります。他機関との連携はこの意義でも大切であると思います。

(大学院医学系研究科脳情報回路学 教授)

—— 医学部記念館所蔵資料から ——

芝蘭堂新元會図、通称オランダ正月(複製)(表紙写真)

寺畑 喜朔

旧記念館廊下の座敷にかけられていた大幅(123×241糎)でかつて旧記念館を活用した学生らには思い出される軸である。この軸は旧記念館の取り壊しの際、片付けられ、以来所在が不明であったが発見されたので、昭和62年(1987)から記念館に飾る。

旧記念館は、金沢医学専門学校創設25周年に建設され、大正5年(1916)10月28日に盛大に開館された。この軸の正式名称は「芝蘭堂新元會図」で、開館当日、第一外科の下平用彩教授(十全会理事)が寄贈したもので、所蔵者大槻家が明治35年(1902)に複製し頒布した。原画が早稲田大学に所蔵されているが複製軸の現存は珍重である。

「北陸における近代医学の源流」より転載
(金沢医科大学名誉教授)

金沢大学附属図書館所蔵（旧制第四高等学校旧蔵）広開土王碑拓本について

文学部 古畑 徹

金沢大学附属図書館には、旧制の第四高等学校が持っていた広開土王碑拓本（軸装・全8幅）が所蔵されている。この拓本は従来、学界では全く知られていなかったもので、学内でも附属図書館の月報『こだま』第12号（1971年10月10日）に、N・F氏の筆名で『「広開土王碑」拓本』というコラムが載った以外、最近までほとんど紹介されていなかった。それが昨年（2004年）、資料館で開催された特別展「文字 人 ころろー金沢大学ゆかりの墨跡・拓本・手跡」（10月25日～11月7日）に出品され、久しぶりに日の目を見ることとなった。

筆者も本拓本の存在を知ったのは、笠井純一資料館長（当時）から上記特別展における本拓本解説文の執筆依頼を受けた時である。その後、執筆のために二度実見したが、各面を上下に分けて表装し全8幅としたきわめて特殊な拓本に思えた。そこで、本年（2005年）1月12日に、広開土王碑の研究者として知られる白崎昭一郎氏及び古代史研究者でもある半沢英一工学部教授にも立ち会っていただき、院生・学生数名とともに調査を行った。本稿はその調査結果の報告だが、本論の前に広開土王碑の簡単な説明と、本拓本の入手経緯等についての概略を記しておきたい。

広開土王碑は、中国吉林省集安にある高句麗第19代広開土王（在位391-412）の顕彰碑で、414年に建立された。高さは約6.3mで、碑石の四面すべてに文字が刻まれ、各面11行・10行・14行・9行、毎行41字（碑石の形状との関係で一部は41字未満）で、総字数は約1775字である。本碑は荒草に埋もれていたところを1880年に再発見された。1883年、陸軍参謀本部員・酒匂景信によってその拓本（正確に

は墨水廓填本）が日本に将来されると、いわゆる辛卯年条（I面9行目）等の倭に関する記事が注目され、4世紀末から5世紀に日本（碑文上は倭）が朝鮮半島に進出していたことを示す確たる証拠とされた。戦後、朝鮮史研究のあり方の再検討が進むなか、1972年に李進熙氏が、日本の参謀本部が碑面に石灰を塗り、日本にとって都合のよい文面に碑文を改竄したとの説を発表し、マスコミ的な話題にもなった。この改竄説は石灰塗布以前の原石拓本の確認などによって否定されたが、これを契機に原石拓本・石灰拓本等の存在が再認識され、拓本自体の調査・研究の重要性も認識されるようになった。本拓本の調査結果を報告する学術的意味はここにある。

本拓本の入手については、第四高等学校の『和書第四門支給命令票』（金沢大学附属図書館所蔵）に、「梅津忠清寄贈」とある。梅津忠清とは、当時、金沢の歩兵第7聯隊聯隊長であった梅津忠清大佐のことである。彼がいかなる経緯で本拓本を入手したか、またいかなる事情で第四高等学校に寄贈したかなどは、現在のところわかっておらず、今後の課題としたい。寄贈を受けた年時は、本『支給命令票』の請求及返納の欄に大正5年（1916）11月25日とあり、支給と記帳の欄にも11月25日とあるので、その日もしくはその数日前であろう。代価の欄には「八〇円」とあるが、これは代価が支払われたのではなく、本『支給命令票』の他の寄贈事例から評価額と推定される。また、本『支給命令票』の数量の欄には「一部八軸」とあり、寄贈前から8幅であったことがわかる。所蔵にあたっての分類は「和四門 三一 二二」であった。現在この8幅に付された、その面の上下段か

を示すシールの記載には間違いがあり、Ⅰ面上段が「三上」、Ⅰ面下段が「三下」、Ⅲ面上段が「一上」、Ⅲ面下段が「一下」、Ⅳ面下段が「1上」となっている。このシールがいつ付されたかは不明である。

また、本拓本には『広開土王碑拓本解説』という6葉の直筆稿本が付されている。著者は不明で、第6葉裏の末尾に「大正七年三月」の日付がある。内容は、第4葉までが「前歩兵第七聯隊長梅津大佐寄贈／広開土王碑拓本」の釈文で、拓本が上下になっていることを考慮して、「第一幅 十一行／第二幅 十一行」のように上下を一つにして記述する。ただし、どこまでが奇数幅でどこからが偶数幅かわからないと困るので、各幅の一行は本書紙面の一行に収められ、行頭から始まる行が奇数幅＝上段、一字落として始まる行が偶数幅＝下段となるようになっている。第5葉以降は「付録」で、第5葉には横井忠直の「高句麗碑出土記」が、第6葉には「朝鮮総督府編纂朝鮮古蹟図譜解説」が引用されている。

さて本題に戻り、本年1月の調査結果について報告する。

筆者が本拓本を特殊と見た理由の第一は、拓本が第21字目と第22字目の間を境にして各面上下に分割されて表装されている点である。管見の限り、他に同様の例は存在していない。第二は、各面の行数が本来の碑面と異なり11行・11行・10行・11行となっている点である。Ⅰ面は同じだが、Ⅱ面の11行目には本来のⅢ面の2行目が置かれ（Ⅲ面1行目は拓出されていない）、Ⅲ面は本来のⅢ面の3～12行目だけしかなく、Ⅳ面の最初の2行には本来のⅢ面の13・14行目が置かれている。このような移動がある例も、管見の限り他に存在しない。なぜこのような形態となったのかが、まず一つ目の課題であった。

調査の結果、もともと一度裏貼りしてあつ

た拓本を、裏貼りの紙ごと切って貼り付け直し、このような形になったことがわかった。そのあり方はⅢ面の前後を切り取ってⅡ面・Ⅳ面に付しただけでなく、成形のための部分修正と見られる小さな切り貼りも存在する。また、各幅のたて横を計測したところ、表装の外枠がたて320.0～322.4cm・横146.5～147cm、内枠がたて276.9～278.6cm・横138.5～139.5cmで、ほぼ同じ大きさであることがわかった。ここから推定されることは、各幅を同じ大きさに揃えるために、一旦表装された拓本を解体してこの拓本の掛軸8幅を作ったということである。この行為は掛軸として掛けた場合の利便性と美的感覚によるものであり、これを行った所有者は本拓本を史料としてよりも美術品・調度品としてみていたといえるであろう。その所有者が梅津であるか、それ以前の誰かであるかは、今後の検討を待たなければならない。

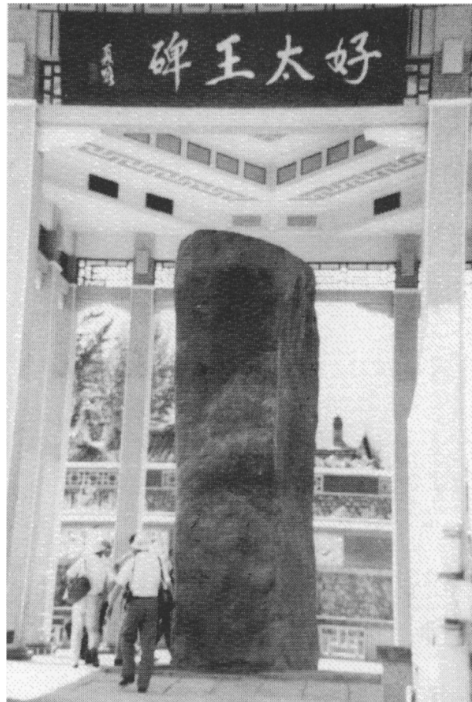
二つ目の課題は、本拓本がいかなる種類の拓本と位置づけられるかであった。結論を言えば、石灰拓本であることは間違いなく、当日は白崎氏から石灰拓本特有の文字についてのご教示を受けながらそれを確認した。記して謝意を表する次第である。また、武田幸男「天理図書館蔵「高句麗広開土王陵碑」拓本について」（『朝鮮学報』174, 2000年）に記された初期の石灰拓本の特徴ともほぼ合致しており、Ⅰ面左側からの石華が連続6行にわたっているのも、武田氏のいうC1-3型（中野政一旧蔵拓本と同類型）という初期石灰拓本に分類されるように思われる。この点については、武田氏に写真を送って意見を伺ったところ、武田氏からもC1-3型の可能性が高いとの所見をいただいた。ただ残念なことは、2月に予定されていた、拓本実見のための武田氏の来沢が、諸般の事情で延期となったことである。この点の最終確定は、後日、武田氏の実見による所見を待つてのこととし

たい。

上記の他に、拓出時に使用した紙の貼り合わせ方も可能な限り調査してあるが、ここに提示するだけの紙数はない。今後、残した課題などの調査が進展し、再度稿を起こすことがあれば、その折に提示することとし、ひとまずは拙い本稿を終えることとする。

[追記]本稿は在外研修先であるアメリカ・ウイスクンシン州マディソンで執筆したものである。そのため、金大資料館の田嶋万希子さんに執筆にあたっての資料の再確認を何度かお願いした。ここに記して謝意を表する次第である。

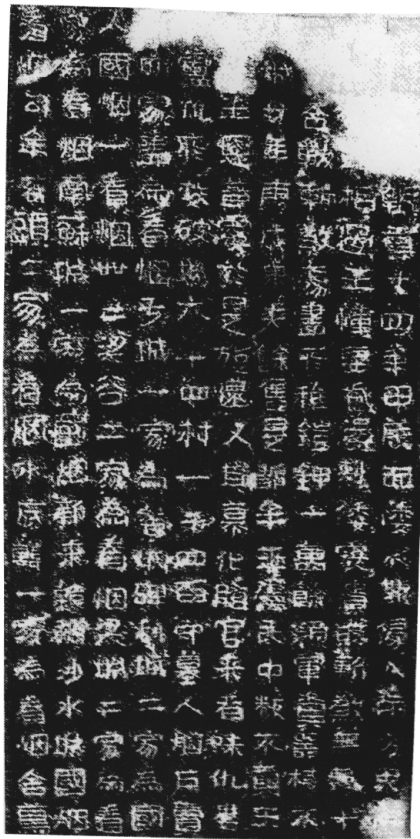
(文学部東洋史学 教授)



「広開土王碑全景 筆者1984年撮影」



← 第IV面上部



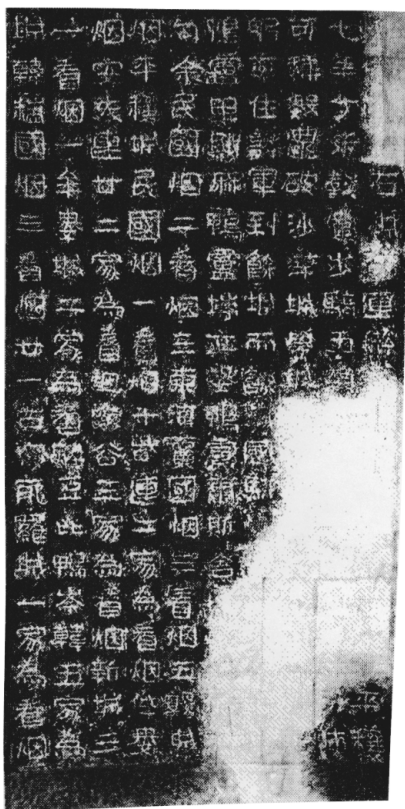
← 第III面上部



→ 第II面上部



← 第IV面下部



← 第三面下部



→ 第II面下部

第III面の拓本（左）と『広開土王碑拓本解説』积文（右）

第III面の状況を示すために、上下に分かれた第III面の拓本の写真と、この拓本に基づいて积読した『広開土王碑拓本解説』の积文を載せた。积文は、第III面本来の姿がわかるように、本拓本第II面11行目と第IV面1・2行目を加え、分割状況を罫線で囲んだ。最上部右端の白抜き部分が碑文本来の9行目まで続いているが、これも武田氏が指摘する初期石灰拓本の特徴である。

資料館彙報（平成17年1月～平成17年6月）

- 1月31日 金沢大学資料館資料目録3「石川県専門学校物理機器図録－明治10年代の物理学教育と文部省交付機器」発行
- 2月19日 大学教育開放センター主催 金沢大学生涯学習関係行事資料館特別見学会
- 2月14日 金沢大学資料館資料史料叢書1「和蘭陸軍第一等医官私魯以斯氏口述藤本純吉筆記「舎密学」」発行
- 3月4日 附属図書館から前身校写真等移管
- 3月23日 平成16年度第3回資料館委員会開催
- 3月29日 国際交流課から本学を訪問した海外の大学からの記念品資料受託
- 3月31日 石川県立歴史博物館から須恵質人物埴輪返却
- 4月1日 笠井純一前館長（2期4年）任期満了につき、田中重徳（医学部教授）資料館長就任
- 4月4日 第四高等学校外国人教師 Ernst Wohlfarth 氏（在職1902－1921）のご令孫 Monika Reich Wohlfarth 氏来館
- 4月8日 平成17年度資料館特別展「金沢大学資料館へようこそ」開催（4月28日まで）
- 4月22日 平成17年度文学部博物館実習受講習生受入
文学部地理学史学入門学生、附属図書館「大学図書館への招待」受講生来館
- 5月2日 富山県立雄山高等学校生徒来館
- 5月20日 富山県立南砺総合高等学校生徒来館
- 5月23日 富山国際大学附属高等学校生徒来館
- 6月1日 平成17年度第1回資料館委員会開催
- 6月8日 石川県立野々市明倫高等学校生徒来館
- 6月22日 薬学部元助教授木村久吉氏来館

金沢大学資料館だより 第26号

館長 田中 重徳（医学部教授）

館員 在田 則子

館員 田嶋 万希子

〒920-1192 金沢市角間町(附属図書館内)

金沢大学資料館

Tel(076)264-5215 Fax(076)234-4051

E-mail museum@ad.kanazawa-u.ac.jp

発行日 平成17年8月3日

編集発行 金沢大学資料館

ホームページURL

<http://web.kanazawa-u.ac.jp/~shiryo/index.html>